

# 洛友会報

## 京大電気関教室

### 西側建物竣工

副会長 大谷泰之

題する論文の中の黒光りする、「石炭菩薩」と明晃々たる「電気如来」の話も引用された総長の有意義な話と感謝のことばを述べた次第であった。そして筆者はこの総長の祝辞全文を洛友会会報の次号に掲載されて頂きたくご了承をお願いした。総長は渡欧旅行前のご多忙の中を祝辞全文と前記青柳谷本博士の論文の拡大コピー、それに毎年春ごとの卒業式や入学式の総長の祝辞をまとめた春序の最近号まで添えて総長から筆者宛送つて頂いた次第であった。

茲に西島総長の祝辞全文を関係各支部総会でいつも話題になつたあの懐かしい赤レンガ建築の教室玄関ボーチがこの新嘗建物にも組込まれ、その前にある銀杏の樹も元通り植えられたことについて、関係の皆様の並々ならぬご苦労に対し感謝のことばを先づ述べた。

(元、九、一〇記)

次いで西島総長の祝辞に対しても、故青柳栄司先生の「同志に代つて我電気工業界の現状を論じ電気評論」を発刊する所以を明にすと題する論文を、総長自身で調査引用して書下された祝辞は、式典に出席した筆者は誠に深い感銘を受けた次第であった。その後開かれた祝宴で筆者は乾杯の音頭をとつたが、その前の挨拶で、筆者はこの改築は教室関係者は勿論、

洛友会員が多年の間等しく待つてきた母教室西側建物の改築については、本会報の既刊号に度々報告されてきたが、愈々去る8月26日その竣工披露式典が行われ京大西島安則総長が出席され、別稿のような意義深い祝辞を述べられた。

この祝辞の中で七十六年前の大正二年創刊された「電気評論」の第一巻第一号の巻頭に掲載されて

いる故青柳栄司先生の「同志に代つて我電気工業界の現状を論じ電気評論」を発刊する所以を明にすと題する論文を、総長自身で調査引用して書下された祝辞は、式典に出席した筆者は誠に深い感銘を受けた次第であった。その後開かれた祝宴で筆者は乾杯の音頭をとつたが、その前の挨拶で、筆者はこの改築は教室関係者は勿論、

故谷本富博士の、「電気の社会力」はこの改築は教室関係者は勿論、

京都大学工学部  
電気系教室内  
洛友会  
京都市左京区吉田本町



竣工式祝宴  
(西島総長、得丸工学部長、及筆者)

## 電気工学科等研究棟

### 竣工披露式祝辞

総長 西島安則



この度、電気系教室、イオン工学実験施設、重質炭素資源転換工室、及び工学部国際交流室の合同研究棟として、この「電気系学科等研究棟」が見事に完成しましたこと、心よりお祝い申し上げ、竣工に当たり、これまで御尽力、御協力賜りました皆様に厚く感謝の意を表わしたいと存じます。

この研究棟の竣工に当たり、作成された冊子のはじめに、得丸英柳先生の論文を京大本部図書館で見つけて引用されて祝辞書き降されたこと（現在筆者電気評論誌の出版の総括的なお世話をしている）更に同誌第一巻第七号のことを知らなかつたことを恥じている）

今世紀の初頭、明治33年（1900）、現在のこの地にレンガ造一階建の北半分が竣工し、続いて明治35年（1902）に南半分が竣工し、全館完成いたしました。山本治兵衛氏の設計であります。大正10年（1921）になつて階上部が増築され、同時に西側正面に玄関ボーチが設けられ、全容が整いました。この第2期工事は永瀬狂三氏の設計であります。そ

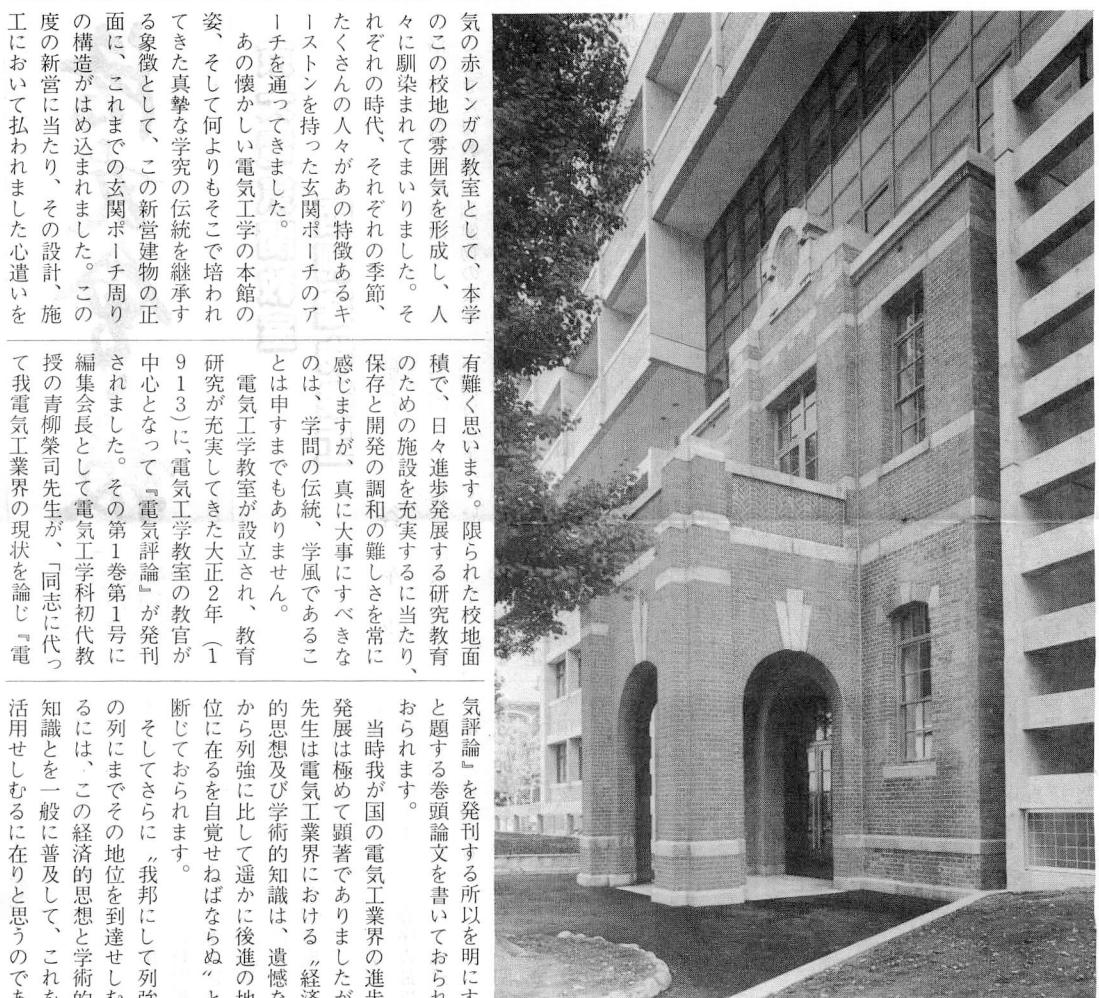
れから65年以上の間、懐かしい電

気工学科は当初、電力工学及び電気磁気学、同測定法を主とする電気工学第1講座、及び電気機器を主とする同第2講座をもつて明治31年（1898）9月に授業を開始しました。今から91年前のことと、心よりお祝い申し上げ、竣工に当たり、これまで御尽力、御協力賜りました皆様に厚く感謝の意を表わしたいと存じます。

この研究棟の竣工に当たり、作成された冊子のはじめに、得丸英柳先生の論文を京大本部図書館で見つけて引用されて祝辞書き降されたこと（現在筆者電気評論誌の出版の総括的なお世話をしている）更に同誌第一巻第七号のことを知らなかつたことを恥じている）

明治30年（1897）6月に京都帝国大学の官制が公布され、最初に理工科大学が設置されました。

同年9月、まず、土木工学、機械工学の両学科が開設され、翌明治31年（1898）電気工学、採鉱冶金、製造化学の3学科が開設され、現在の工学部の基礎が固められました。

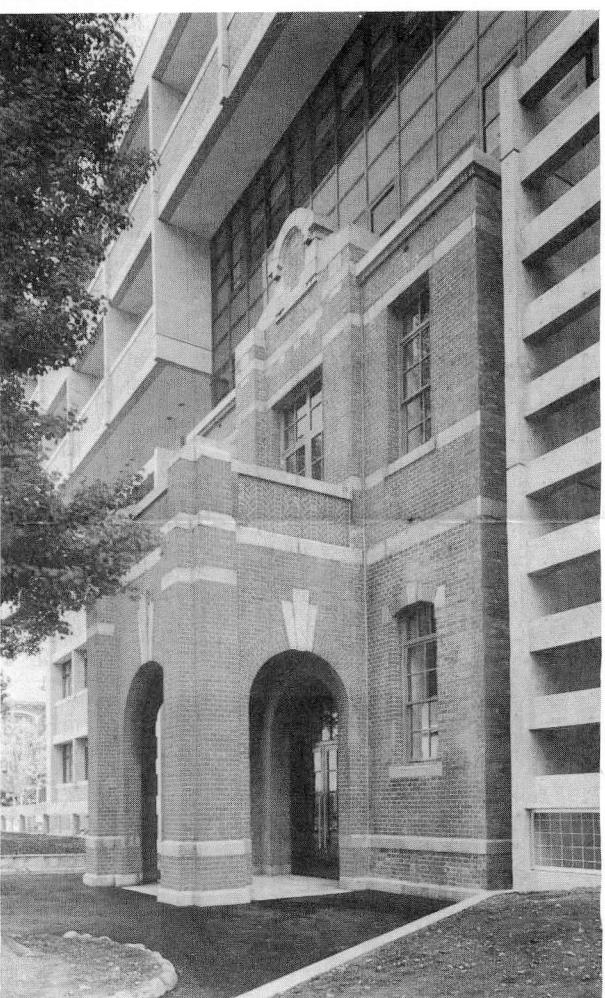


氣の赤レンガの教室として、本学のこの校地の雰囲気を形成し、人々に馴染まされてまいりました。それぞの時代、それぞれの季節、たくさんの人々があの特徴あるキーストンを持つた玄関ボーチのアーチを通ってきました。

あの懐かしい電気工学の本館の姿、そして何よりもそこで培われてきた真摯な学究の伝統を継承する象徴として、この新營建物の正面に、これまでの玄関ボーチ周りの構造がはめ込まれました。この度の新營に当たり、その設計、施工において私われました心遣いを

有難く思います。限られた校地面積で、日々進歩発展する研究教育のための施設を充実するに当たり、保存と開発の調和の難しさを常に感じますが、真に大事にすべきなのは、学問の伝統、学風であることは申すまでもありません。

電気工学教室が設立され、教育研究が充実してきた大正2年(1913)に電気工学教室の教育が中心となつて『電気評論』が発刊されました。その第1巻第1号に編集会長として電気工学科初代教授の青柳榮司先生が、「同志に代つて我電気工業界の現状を論じ」『電



る、而して吾々の如き学問の研究に従事して居る者は、これらの為めに能う限り尽力を為すのは当然の義務で、為さざるはその罪むしろ軽からざるものと信ずるのである。"と述べ、そして、"我が国における経済的思想の幼稚なること、及び学術上の知識が普及し居らざることの例証と合せてその進歩を阻害せる原因"と、8つの項目について論じた後に、"翻つて世上を見れば、一方には学問を研究してゐる篤学の士が少なくなく、他方には事業經營上の実行家たる実業者が満ちている。それにも拘らず前述の如く単に電気事業について見ても、その健全なる発達を阻害したる所以は、一見奇異の感あるも、これは蓋し学者はむしろ学問を弄ぶの觀を呈し、実行家は知識の活用を怠るからである。これを救済するには畢竟学問と実地の思想及び学術的知識は、遺憾ながら列強に比して遙かに後進的地位に在るを自覚せねばならぬ"と断じておられます。

そしてさらに、"我邦にして列強の列にまでその地位を到達せしむるには、この経済的思想と学術的知識とを一般に普及して、これを活用せしむるに在りと思うのである。"と論じておられます。

ヨーロッパではイギリス、フランスで学問の伝統に立った科学技術の進展が着実に行われ、そして、一方、その頃の新興国のドイツにおいては、ベルリンを中心として各種のプロジェクトについての研究所が次々に発足し、科学技術の推進が強力に進められ、また、アメリカの新天地では新しい発明に基く工業化が目覚ましい勢いで始めていました。

日露戦争に勝利をおさめた我が國は、しかしながら明治維新以来の急速な文明開化、富国強兵の国策に対し、ようやく学術研究の尊重と科学技術に基く産業の基盤の強化が、識者の間で真剣に論じられるようになつた時代であります。

『電気評論』はこのような背景の中、電気工事の専門分野、電気工業の具体的な諸問題を論じるのみでなく、それは一つの重要な時代の転換期における一国の文化と政治、産業、経済、社会のあり方を、電気というものを中心にして明らかに表現しているものと私は思います。

さらに、私にとつて大変印象的なことは、この『電気評論』が電気工学を中心とした学界と産業界との交流のみでなく、より広い学問分野での総合を意図して編集されていることがあります。

ヨーロッパではイギリス、フランスで学問の伝統に立った科学技術の進展が着実に行われ、そして、一方、その頃の新興国のドイツにおいては、ベルリンを中心として各種のプロジェクトについての研究所が次々に発足し、科学技術の推進が強力に進められ、また、アメリカの新天地では新しい発明に基く工業化が目覚ましい勢いで始めていました。

日露戦争に勝利をおさめた我が國は、しかしながら明治維新以来の急速な文明開化、富国強兵の国策に対し、ようやく学術研究の尊重と科学技術に基く産業の基盤の強化が、識者の間で真剣に論じられるようになつた時代であります。

例えば、当時法科大学教授織田萬博士は「科学の応用と國力の發展」と題して論じ、また、文科大學の教授谷本富博士は「電気の社會力」と題する論文を電気評論第1号・第7号に書いておられます。また、理工科大学教授小倉公平博士(電気磁氣学)は「所謂獨乙流と亞米利加流」と題して興味ある論文を寄せ、科学の研究との應用のあり方の比較をしておられます。

あのレンガ建ての氣の教室が、その玄関ボーチを残してこの輝くばかりの新館に竣工しました。前の電気工学の建物が竣工した頃の教室の雰囲気は、この『電気評論』の論文の中に生き生きと現われています。玄関のキーストンは、それらの先達の方々を見守つてまいりました。そして、それはそのままこの新館に引き継がれたのであります。

先程紹介しました『電気評論』に、「電気の社會力」と題して書かれた谷本富先生の文章は、次のような言葉で始まっています。

「自分はかつて今日吾侪の一般に信仰すべき者は、黒光りのする石炭菩薩と、明晃々たる電気如来とであろうと言つた。これは固より一場諧謔に過ぎざるようだが、その裏には不可争の真理を含んでるので、自分は実にこの石炭と

電気との二者をもつて現代文明の原動力と見做さんとするのである。」

石炭菩薩と電気如來という表現は谷本富先生らしく、大変おもしろいと思います。この度の「電

気系学科等研究棟」は、電気系教室の他、イオン工学、重質炭素資源転換工学の両実験施設と應用シ

(平成元年8月26日京大会館にて)  
ス テ ム 科 学 教 室 が 置 か れ、さ ら に 工 学 部 国 际 交 流 室 が 設 置 さ れ た 合 同 の 研 究 棟 で あ り ま す。私 は こ こ に、こ れ か ら の 文 明 の 原 動 力 と、人 類 文 化 の 根 幹 と な る 知 性 が 磨 か れ ま す こ と を 心 よ り 期 待 い た し ま す。

皆様、有難うございました。

## 電気系教室だより●●●

### 懇話会秋期講演会とビアパーティーのご案内

恒例の電気系教室秋の懇話会を左記のように開催致します。各分野でご活躍の諸先輩のご講演に引き続きビアパーティーを予定しております。先輩各位にも多数ご参加頂けることを期待しております。

#### 記

日時 10月14日(土) 午後1時より  
場所 京都大学工学部 電気総合館 大講義室

### 第一部 講演会

- 1 私の過してきた会社生活  
日下部 悅一 古河電気工業会長(昭21卒)
- 2 21世紀をめざす技術について考える  
西村正己氏(京都から札幌へ移り永住されることになり、これを機に7月31日札幌時計台近くの大和屋で、会員9名が出席し支部総会を開催した。
- 3 雑感  
伊藤利朗 三菱電機取締役(昭29卒)
- 4 池上淳一 名誉教授(昭18卒)
- 5 第二部 ビアパーティー  
(午後5時ごろより北部生協 ほくと)

## 昭和21年入学者卒業 40周年記念クラス会

私は毎年1回クラス会を開いていますが、今年は24年卒業後40周年に当たり、平成元年7月16・17



## 北海道支部總会報告

北海道の会員の増えることが、仲々難しい中で、講習所和年12年卒の西村正己氏が京都から札幌へ移り永住されることになり、これを機に7月31日札幌時計台近くの大和屋で、会員9名が出席し支部総会を開催した。

昔話から近況に至るまで和かな話がつきず、はじめてのゴルフ会での再会を約した。

日京都において記念集会を催しました。林千博先生未亡人弥生様はじめ大谷、近藤、池上淳一、竹屋の諸先生をお招きし、全国より27名のクラスメートとその夫人連れ9名、佐々木喜一君未亡人和子様の御出席を得、盛大な会となりました。

7月16日(日)は南禅寺菊水にて開会、森井代表幹事から、百年前日本最初の発電所ができたこの地において我々が卒業後四十周年のクラス会を開くことは意義深いものがある。当時お世話をなった諸先生の御恩に深く感謝する旨の挨拶に始まり、諸先生方より御自由の御出席を得、盛大な会となりました。

7月16日(日)は南禅寺菊水にて開会、森井代表幹事から、百年前日本最初の発電所ができたこの地において我々が卒業後四十周年のクラス会を開くことは意義深いものがある。当時お世話をなった諸先生の御恩に深く感謝する旨の挨拶に始まり、諸先生方より御自由の御出席を得、盛大な会となりました。

89.7.31



身のこと、教室の現況、ヤンチャであった私達の思い出などのお話をありました。お互同志の歓談に時たつも忘れ散会を一時間も延ばしました。終了後三五五宵山見物に出かけ京都の夜の風情を満喫いたしました。

翌17日(月)は市役所前の桟敷席で絢爛豪華な山鉾巡行を見物、京都ホテルで昼食、浮足したお祭り気分で解散いたしました。

来年は恒例にしたがい関東地区で開かれることになります。

今回の参加者はほんのどうり。安藤、安戸、伊藤、飯田夫妻、生駒夫妻、岩村、江口、近江、太田実、岡崎、中門脇、兼本、北島、佐野、関夫妻、中野夫妻、永見夫妻、野村夫妻、浜田夫妻、二松、舟田、松村、森井夫妻、吉田祝、松山、川口、西田、故佐々木喜一夫人、以上

昭和42年卒業

## 関東地方同窓会

去る8月25日、新宿ワシントンホテルにて、久しぶりに集まつた。日頃ときどき顔を合わせている関東在住の有志が、一度関東だけで同窓会を開いてみよう、と話し合っていたのが実現したものである。電話で案内をしただけであつたが、卒業後初めて顔を合わせ



前号で、一先ず完結の積りであったが、編集の竹村さんのお薦めにより、引き続いて中国に関する雑文を呈する事にする。読者、諸先輩、同後輩皆々様の、変らざる御支援と御教示方、よろしくお願ひしたい。

### 算盤

中国で買物をするとき必ず算盤を見る。店頭のガラスケースの上に、でんと置いてある奴だ。その算盤は、下段の玉は五ヶで、上段は二つ玉である。しかも玉はでかくて黒い。日本の黒飴とそっくりである。これが算盤の原型であり、それこそ何千年(?)もの間、どう。上段は既に一つ玉になつており、たゞ下段だけが、未だ五つ玉であった。そして、戦時中だったと思つかたと思われ、また恩師の先生方をお招きすることもできなかつたが、これからもとき折り開こうと約束して、お開きとなつた。

(来山征士・板倉秀清記)

### 中國雜記 (10)

昭和23年卒

坊 資

今日は、急に思い立つて催したので、連絡が完全には行き届かないからと思われ、また恩師の先生方をお招きすることもできなかつたが、これからもとき折り開こうと約束して、お開きとなつた。

(来山征士・板倉秀清記)

日本の算盤は、私が小さい頃は、上段は既に一つ玉になつており、たゞ下段だけが、未だ五つ玉であった。そして、戦時中だったと思つかたと思われ、また恩師の先生方をお招きすることもできなかつたが、これからもとき折り開こうと約束して、お開きとなつた。

(来山征士・板倉秀清記)

中国の場合は少々異なる。今でも大きくてごつい古色蒼然たる原型そのまゝの算盤を用いている。どこの商店でも、必ず置いてあります。殆どが黒々と油(油)りした時代物という感じのものばかりである。買物をするとき、店員が悠然と大きな玉を上に押し上げ、下に押し下げ(はじく)という感じではない)、勘定をしてくれる。物を一つだけ買つても、必ずこの貫禄充分な算盤で計算してみせ、それから釣銭(釣銭)をくれる。

### 微笑

日本では、店員、ウエートレス、窓口嬢等、サービス部門にいる人は、常に微笑を絶やさない。そ

使い慣れた五つ玉の算盤を確保しておき、紐で机に結びつけて、私専用としていたが。

最近の事務所では、殆んど算盤を見かけなくなつて了つた。たゞ頭脳の訓練になるとかで、子供達の算盤塾は、物凄くはやつてていると聞く。

日本は、外国からとり入れた文化を実際に消化し、あつというちにそれを更に発展させて行く。

日本の算盤は、果して中国から入ったのか、如何なる経路で入ったのか、私はよく知らない。が、もしそうであれば、あの中国の重厚な原型算盤から、不要部分を惜しきりで、これが算盤の原型であります。それこそ何千年(?)の間、ずっと使い続けられて来たのである。

電卓は、大都会の一部の商店に見かけるのみで、それも店員が必ず採るのは電卓でなく、算盤であります。最近は電卓も大部分普及して来て、銀行等では殆ど算盤を登校していたのを思い出す。

電卓は、大都会の一部の商店に見かけるのみで、それも店員が必ず採るのは電卓でなく、算盤であります。最近は電卓も大部分普及して来て、銀行等では殆ど算盤を登校していたのを思い出す。

算盤の品種についても、殆どが同じ大きさの黒っぽいこげ茶色一種だけである。小さいや、変わった色のものは、玩具を除いては未だ見たことがない。私の子供は二人共北京の小学校で学んだが、あちつぱけな子供達が、可愛い手縫いの布製カバンと共に、あの大きな中国算盤を紐で肩からかけて登校していたのを思い出す。

中国は、中国文化について、限らず採るのは電卓でなく、算盤であります。最近は電卓も大部分普及して来て、銀行等では殆ど算盤を登校していたのを思い出す。

中国は、中国文化について、限らず採るのは電卓でなく、算盤であります。最近は電卓も大部分普及して来て、銀行等では殆ど算盤を登校していたのを思い出す。

中国では親しい者以外、一般に微笑を見せない。特にサービス部門では、めったに笑顔に会う機会はないと云つて良い位である。飛行機に乗ればサービス部に、レストランに入ればウェイトレスに、デパートに行けば売子嬢に、恐ろしく怖い顔で睨みつけられる。何か尋ねると、それこそ「ダツダツダツ……」と、機関銃の如き早口で怒鳴りつけられる。テレビのアナウンサーにしろ司会者にせよ、皆固い厳肅な顔をして、やはり笑顔を見せない。中国に旅行した人々の感想文や手記を見ると、必ずといってよい程、この事に言及している。「スタイルの良い可愛い娘達なのに、皆きつい眼つきをして、ニコリともしない等々と。では、こぼれる様な微笑」というものは、中国には全く存在しないのであらうか。

いや、無い訳ではない。相手によりけりなのである。現に、デパートの売子達が、客を放たらかしてべちゃくちや夢中になつて談笑している時は、皆ニコ／＼して実際に楽しそうである。又中国銀行等で、長い行列を作つて待つている客なんかを見向きもせず、同僚達と、おしゃべりに熱中する窓口嬢

らのあの輝くばかりの笑顔。だが、呼ばれて振り返つて我々に相対する時の彼女らは、忽ちキッと柳眉を逆立て、「何が公事!?」(何の用!)と大きな眼をむく。そこで、『何とまあ愛想の悪い娘達……』という感想となるのである。

つらく考えるに、これらの現象は、考え方从根本上に違う所から来るらしい。即ち、見も知らない人に、微笑を見せるという事は、媚びを売ると解釈されるのを恐れる為なのかも知れない。これは大陸ばかりでなく、台湾や香港でも同じ様な傾向が見られる。中華航空(台湾)のスチュアーデスは皆スカットとチヤイナドレスを着こなしたスタイル満点の美女揃いであり、サービスも中々良いが、やはり、微笑だけが欠けている。日本航空の香港航路には、中国人(香港人)スチュアーデスが必ず乗つており、彼女らは日本で充分訓練を受け、流暢な日本語を話し、人によつては日本人スチュアーデスよりしとやかであるが、微笑はうんと少ない。

逆に日本人は、笑い過ぎるといふ説も聞いた事がある。

「笑うべからざる時に笑う」「誰にも笑いかける」「返事の代りに笑う」「誰にも笑いかける」「不可思議な微笑」「無意味、無気味な微笑」

そして、非常に誤解を生み易い  
「ジヤバニーズ・スマイル」と批  
判する外国人の書いた文章を読ん  
だ覚えがある。

そう云えども、愛する貴妃の微笑  
見たさに、街を焼き払つたり、残  
虐行為をやつたりした東西の暴君  
の物語が歴史に残つてゐる位であ  
るから、外国の美女は、日本と違  
つて、そう安っぽく笑つたりなん  
かは、しなかつたのかも知れない。  
勿論、「モナ・リザ」の如き神秘な  
微笑もあるにはあつたが……。

日本でも、一時期は微笑どころ  
ではなかつた時がある。戦時中、  
終戦直後、官僚主義、空襲、食糧  
難等々で、社会が不穏に動き乱れ  
た時であり、人間同士の関係も、  
ギス／＼していた時代であつた。  
あの様な雰囲気は、もう二度と体  
験したくないと、ひたすら願うの  
みである。

先日所用で杭州へ行つた時、「樓  
外樓」と云う有名なレストランの  
玄関に、黒いスーツをキチツと着  
込んだ可愛い娘が二人立つて、ニ  
コニコと愛嬌を振りまいていた。  
その肩に斜にかけられた襟には、  
「微笑在您的身辺！」と書かれて  
いる。即ち「ニコ／＼キャンペー  
ン」である。中国では色々な所へ  
行つたが、微笑によるサービス向  
上運動に出喰わしたのは始めてで  
ある。やはりニコ／＼する方が、

「ブスツ」としているより良いという事が、やつとわかつたのかと大きいに感激して、早速その娘らと一緒に記念写真を撮つたが、よく聞いて見ると、彼女らは浙江大学の学生で、サービス週間のアルバイトで来ているのだと。レストランに入つて見たが、内部のサービスは、相変わらずのひどいものだつた。

この様な、親しくない人に對しては、先ず警戒が先立ち、媚を売ると見られる事を極端に恐れ、軽々しく近づかず、従つてニコリともしない、という習慣は、中国の儒教の道徳の「貞」、即ち「貞女は二夫に見えず」の精神と通ずるものがあるのかも知れない。その長いく、それこそ何千年の歴史を経て培われて来たものであり、一朝一夕に変える事は、一寸難しいのではないか。

ニコ／＼運動は、大いにやるべきであるが、その成果はやはり全社会と連動して少しづゝ前進していくものなのである。現に最近陸続と建設されている外国と合弁のホテルやレストランでは、開放政策や、四つの現代化運動の影響を受けてか、以前と様子が大分かわり、ニコ／＼する服務員や、ウエイトレス等が、出現し始めている。物質と精神共に豊かになるにつれて、人間関係も、だん／＼和やか

西洋人は、人々狩猟民族に属し、早くから犬を飼い馴して、獵犬や番犬として用いた。そして飼犬は家族の一員として扱われ、人間の子供らは、犬と転がりまわって、遊び乍ら成長している。その為、西洋人は一般に犬に対して深い感情を持つてゐる様だ。香港では、住民の大部が中国人（広東人）であるに拘らず、支配者の英国人の意向により、犬の肉を喰う事は禁じられているとの事。

日本では、"犬は従順"、"よく人になつて"、"主人の云う事を聞く"、"三日飼つたら、三年その恩を忘れないと云われ、古くは八犬伝の八房"から、近くは上野の西郷さんの愛犬や、渋谷駅の忠犬"ハチ公"等に示される如く、忠義の精神に結びつけて考えられて来た。

日本人は、農耕民族であるに拘らず、犬は番犬として、又最近はペットとして、何れも可愛がられる言葉もあるが、これらはどうも外から入つて来た様を匂ひがする

が、どうだろうか。  
中国では、犬は断然悪いものと  
して扱われる。即ち、犬は肉さえ  
与えられ、ば、しかもそれが、た  
とえ腐っていてもすぐに飛びつき、  
誰にでも尻尾を振り、違った主人  
の為にも走り廻る、極めて節操の  
無いものの代名詞となる。“走狗”  
の語も、此処から生れたらしい。  
(中国では、犬のことを“狗”と書  
く)。前にも言及したが、あの偉大  
な文豪魯迅の名言“打落水狗”は、  
中国では余りにも有名である。直  
訳すれば“水に落ちた犬は、打て  
!!”という事となる。即ち、“犬”  
が水に落ちても決して“救ける”な、  
何故ならば、水から上がつて来た  
ら逆に咬みつく。“犬畜生”的如き  
本性を持つた者は、どんなに情を  
かけてやつても、恩を感じずる事な  
く、裏切られるだけだから、徹底  
的に叩きのめすのみである。」と、  
当時帝国主義に幻想を抱く人々に  
警告を発したのである。この時の  
犬は、譬へてはあるが、狼と同類の  
邪悪なものであるという発想なの  
である。中国で、犬(狗)の字が  
つく語で、良い意味のものは極め  
て少ない。

（中国では「屎」を用いる）の前に  
ワザ（犬の字を加え「狗屎堆」となり、「出鱈目言うな！」が、  
「別放狗屁（犬吠屁をこくな」という事になる。又、「貴様の瘦せつ  
首を叩き斬るぞ」も「砍你的狗頭と云う。他にも「狗才（ろくでなし）」  
（お前の犬つ首をぶった斬るぞ）「悪徳役人（悪役人）」「狗友（悪友）」「狗肺  
(腹裏心奴)」等々、これらは皆殆どが罵詈雑言に用いられるのだ。  
中国的北方民族は、元々漢民族ではなく、狩猟民族であつた。後に  
牧畜に移つても、犬はそのまま、番犬として飼い、羊や牛馬を追つて  
来た。番犬を家族の如く遇するのには、西洋と同じであるが、そのあとは、  
「兎をとらなくなつた犬は者て喰われる」の中国の諺の通り、  
役に立たなくなつたら喰つて了つてもよいのだ。  
これは余談だが、中国では、牛  
肉は硬くてまずい、それは、牛は耕牛として徹底的に働かせ、年老いて馬力（？）が落ちて始めて肉として食膳に供せられるからだ。  
又牛に限らず、豚でも鶏でも、肉だけではなく、皮、血、内臓、それこそ爪の垢に至るまで全部料理し、最後に残つた骨は、肥料として田畑に撒く。即ち百パーセント人間様の為に奉仕させるのだ。それに

比べると、日本は無駄が多い。私  
の肉以外は、内臓は勿論全部捨  
てていたと聞く。中国の方が、その  
点ではずっと合理的であつた訳だ  
話を元に戻そう。前述の如く、  
中国では犬を喰う習慣がある。“少  
林寺”という映画で、叩き殺され  
た犬を喰う場面があり、日本のす  
き焼きの様に、鍋を開んで、実際に  
おいしそうに食べていたが、それ  
を見た日本の観衆は、一様に“ウ  
ヘーッ！”と嘆声を挙げていた。  
しかし中国では別に何とも感じない。今でも南方へ行くと、朝市で  
堂々と犬を売っている。勿論犬ばかりでなく、猫、家鴨、鶏、蛙等  
々、皆生きたまま売っている。實に可愛い犬や猫が籠に入れられ、  
積み上げられているが、ペツツシ  
ヨップと異なるのは、客の求めに  
応じて、その場で皮を剥ぎ、肉でも  
も内臓でも、すぐ売つてくれる事  
である。我々が、ピク／＼動いて  
いる鯛の生け造りや、土用の鰻を捌くのを見ても、余り憐憫の情を起さないとの同様、慣れれば、哺乳類に対しても“人に喰われるのが神より与えられた権理である”と割り切れるらしい。

ので、番犬を飼つて見たが、何度も噛み散らすばかりだ。かつたのを覚えている。中国では、飼つても、農民に犬ごと盗られる。餌られていい、番犬の役に立たなかつたのを見かけるが、犬は全然見当らない。犬は家畜の番は出来ても、人間の番は出来ない様だ。人間は魯迅が教えに従つて利口になり、「啖み散らすばからだ。

今中国の都會では、猫は時たま見かけるが、犬は全然見当らない。瞬、さては皆喰われて了つたのかと思えるが、実は市内では犬の飼育が禁止されているのだ。即ち猫は鼠を探るから人間の役に立つが、犬は喰つて糞を撒き散らすばかりで役に立たない、という合理主義かららしい。やはり、物資が相当豊くなり、生活に或程度余裕が出て来なければ、ペット飼育等も、まだ／＼無理なのであろう。事程さきよに「犬」だけについて考えて、日中間の意識の差は未だ／＼大きいのである。

原稿募集

集 爲  
会では、猫は時たま  
は出来ても、人間の  
様だ。人間は魯迅  
利口になり、咬みかか  
れでいるのだ。即ち  
から人間の役に立つ  
て糞を撒き散らすば  
たない、という合理  
無理なのである。  
いのである。

講 昭	講 昭	講 昭	講 大	講 大	講 大
29	14	12	14	11	9
島 紀彥	森谷改之助	吉田文策	有馬敏彦	林正一	小谷藤一郎
63 11 22	1 7 21	1 8 9	1 8 6	1 5 23	1 2 7
				63 22	10